

やよひのついたち、雨そぼぶるにやりける。

おきもせずねもせで夜を明しては春のものとながめくらしつ

〔源氏物語二〕木君はとけてもねられ給はず略○中やをらおきてたちぎ、給へば略○下

〔古今和歌集戀十一〕題しらす
よみ人しらす

つれもなき人をやねたく白露のおくとはなげきぬとは忍ばん

〔小大君集〕正月一日のことなるべし

いかにねてをくるあしたにいふことぞ昨日をこぞとけふをことしと

〔書言字考節用集八〕言辭夙興夜寢詩

〔俚言集覽阿〕朝起は七の徳あり 明心寶鑑景行録云、觀朝夕之早晏、可以識人家之興替、傳家寶、

早起三光、遲起三慌、

〔書言字考節用集八〕言辭寐起

〔枕草子二〕七月ばかりいみじくあつければ、よろづの所あけながら夜もあかすに、月のころは、ね

おきて見いだすもいとおかし、

〔玉勝間八〕おひなるおよる

女の詞に、人のねたるがおくることをおひなるといふ、伊勢などにては、おひるなるといふ、あづ

まにて寝ることをおよるといふ、御晝なる御夜なるといふこと也、

〔類聚名物考人事十二〕ひるなる

起る事なり、今關東の俗にはひんなるといふなり、思ふに寝たるまは夜のさまなるが、おくれれば

晝となるの意なるべし、古事記には此如の字をみな奈須とよめり、如晝の意もあらんか、

〔甲子夜話十四〕林曰、承應ノ頃ノ官ノ日記ニ、大君御目覺ノ刻限ヲ記シタルニ、云云卯時御晝成ト